

目覚めると

狩野景

挿絵/天鬼とうり

従姉妹を  
護る美少女  
剣士になっ  
ていた

試し読み版

二次元ぶち文庫

※本作は『目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていた1～4』および『目覚めると拳銃乙女を護る美少女拳士になっていた』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

An anime-style illustration of a young woman with long, dark blue hair and purple eyes. She is wearing a dark blue jacket with gold trim over a white shirt and a red and white checkered skirt. She is holding a red sword across her chest. The background is a light blue gradient.

**目覚めると従姉妹を護る5**  
**美少女剣士**になっていた

狩野景

表紙 / 天鬼とうり

章乃序	鬼襲
章乃壹	戻橋学園ニテ……
章乃貳	深淵ヲ歩ムモノ
章乃參	修羅ノ猛威
章乃肆	結女ヲ求メテ
章乃伍	最後ノ戦イ
章乃終	黄昏ヘト続ク世界

## 章乃序 鬼襲

全高六百三十四メートル。日本一の高さを誇る電波塔の展望デッキは、休日の賑わいを見せていた。

「うわー、高い、怖いー♪ 町がミニチュアみたい」

「向こうに山が見えるし、さすがの眺めだなあ」

遥かな高みから東京を一望し、人々が感嘆の声を弾ませる。

「ねえ、ママ、あれなあに？」

皆が地上の眺めに夢中になっている最中、家族で訪れたらしきまだ幼い少女が空を仰ぎ見ていた。

「なにかあるの？ 飛行機かな？」

母親が笑顔で答えながら娘が指さす天空へと目を向ける。

「ひっ!? なに？ なんなの、あれ!？」

満面の笑みが驚きに強張った。

悲鳴のような裏返った声に、周りの者たちも釣られて顔を上げる。

途端に、少女の母親と同じ反応を示した。

「お、おい、あれ！」

「嘘だろ……。なんなんだよ」

「あんなどころに、人？ いや、あれは……」

この展望デッキの高さは地上から約三百五十メートル。その空中に生物が静止していた。鳥などではない。歩行のための二本の脚と、物を掴むための二本の腕を備えた人型の体型。だがその大きさは人間を大幅に凌駕していた。

全身に隆々とした筋肉の鎧を纏う。

獣のように恐ろしい顔は金色の瞳を爛々と輝かせ、口元から太く鋭い牙が覗く。

そして、ボサボサの髪を強風に乱れさせる頭部には、二本の角が生える。

「鬼……」

驚愕の光景に人々は言葉もなく、啞然と立ちすくむ。

静寂の中、誰かがぼつりと呟いた。

その呼びかけに応えるように、耳まで裂けた口が開かれ、目映い輝きが溢れ来る。

「轟ッ！」

輝きは灼熱の咆哮となつて、大きな顎門から電波塔目掛けて放たれた。

悲鳴を上げる暇もなく、大勢の観光客が展望台ごと吹っ飛ぶ。

タワーを一瞬で消滅させてさらに、鬼神の口から放たれた衝撃波と熱線は、その進路上

にある町並みをすべて焼き尽くした。

時を同じくして、港区方面では別の鬼神の手によって東京タワーが無惨にねじ曲がり、新宿では都庁をはじめとする高層ビル群、池袋でも六十階建ての超高層建築物が、粉々に碎けて倒壊していた。

さらには……突如の大惨事に怯えて混乱する地上の人々へと、夥しい数の鬼たちが襲いかかった。問答無用で捌り殺し、その血肉を食らい始める。

平和な休日の昼下がりが、一瞬にして地獄と化した。

いったいどこから現れるのか、爆発的に数を増す鬼たちは、東京だけでなく日本の各主要都市にも同時に出現して、暴虐の範囲を地方にまで広げていった。

日本はその日、壊滅の危機に陥った。

過去に数多の怪異を退けてきた霊的防衛の要、鬼繰り一条の屋敷にて、巨大な鏡に映る滅びの様を啖い観る鬼神があった。

「あは、ああ……、町が燃え上がって、ん……、どんどん人が死んでイク♪ はああ〜」  
「んく……、ふあああ、素敵……ですわ、阿修羅童子さまあ。圧倒的な暴力による滅び。

貴方様に、お仕えできて、ふあああああ、光栄、ですわ、あ、ああああん」  
鬼神の傍らに侍って窟穴を太い指に掻き乱されながら、鬼へと堕ちた巡礼聖女シスター・エイプリルとマゼンダが滅びの光景に悶える。

「一条の鬼繰師共に従属を強いられていた我が同胞たちよ。忌々しき束縛から放たれた今、屈辱を存分に晴らすがい」

阿修羅童子の言葉に地を揺るがす雄叫びで応えて、また多くの鬼神たちが町へ向かってゆく。しかもこれまで自分を使役してきた一家の鬼繰師たちが虚ろな表情でくぐもった呻きを漏らしながら、よろけた足取りで鬼神たちに従ってゆく。

「どうだ鬼おに慰なぐさ姫むひめ。貴様の同胞どもが我らへの支配を失い、無様な屍ゲール喰鬼へと墮ちた様は」  
嘲りに声を響かせ阿修羅童子が問う。その視線の先に『禁』と記された呪符を口と手足に貼られ、正座する少女の姿があった。

使役される鬼たちの長き時の間に積み重ねられた恨みが、一条の血筋で最も力を持った乙女をにえ贄とする呪を生み出した。

鬼慰姫と呼ばれるその贄に選ばれた少女、一条結女いちじょうゆめだった。

「口を禁じていては言葉も発せられぬか。俺に恨み言の一つも言いたいところだろうが、思い詰めて自害でもされては面倒だから」

今までの気弱でおっとりとした結女であつたら、ただ怯え、昏倒して夢の世界に逃れてしまつていただろう。

しかしもうこれ以上大好きな従兄に護られるだけのお荷物になるのは嫌と思いを抱き、少年の姿に性別を変えて戦う術を得た彼女は、強大な鬼神の圧倒的な眼差しに怯むことな

く真つ向から睨み返していた。

「鬼斬姫おにきりひめは俺の前に為す術もなく逃走した。お前を救う者はもはや存在しない。その身に溢れる膨大な錬気れんき、すべて俺が食らい尽くしてやろう。それまで世界の滅びをその目で確かめ、絶望に心を満たすがいい」

阿修羅の言葉に巡礼聖女たちが楽しげな笑い声を奏でる。

それでも結女は表情一つ変えず、ただ阿修羅童子を睨み続けていた。

そんな様子に、冴が緊張を解き、笑みを浮かべた刹那、

「この程度の術で、俺を封じられると思ったか。見損なっただぞ、鬼繰一条の総領」

「なんじゃとっ!？」

「ふあああつ、そんなっ!」

空間を切り裂き、阿修羅童子が無理矢理に通常空間へと戻ってきた。

「来い、詩朱奈。今こそ俺と一つになろうぞ」

「たっくん……」

帝の目前に立ち、喜悦に口角を吊り上げて手を差し伸べる。

義弟の肉体を奪ったという鬼神に面影を感じて、詩朱奈が立ち尽くす。

「いけません、陛下っ!!」

「きゃあつ! ああ、冴……。わ、わたし……」

その帝を、一条の総領が必死に突き飛ばした。

危うく難を逃れ、詩朱奈が尻餅をついたまま我に返る。

「卑しい暗殺者崩れの小娘が、まだ俺の邪魔をするか。ならば先に貴様のほうから喰らっ

てやろう」

「あがあああつ! やはりお前は、祐殿などではない。あの方はワシを……。あ、あたしを一人の人間として扱ってくれた。真正直に生きることを教えてくれた。ぐうあああ



っ!!」

鬼神へと墮ちる前の本人との思い出があるのだろう。冴が見た目のままの若々しい口調で呻く。

「俺の知ったことではない」

だが阿修羅童子は無関心な言葉を返しながら、小柄な彼女の首根つこに鋭い爪をめり込ませて押さえ付ける。

「冴様に触るなああっ!」

力を込めればいとも簡単に首筋がへし折られてしまいそうだ。

その有様に、荊鬼童子が必死に飛びかかる。

「貴様もだ、荊鬼。同族に仇成した罪を償ってもらおうぞ」

手負いの身体ではどうにもならず、彼女もまた鋭い角を生やした頭を易々と鷲掴みにされた。自分こそ大勢の鬼族をなんのためらいもなく殺しておきながら、それを柵に上げて阿修羅が荊鬼を責め立てる。

「はぐううっ、こ、この、放しなさいっ」

「く……、なにをするつもりだ……?」

息の根を止めるなら、もう既に冴も荊鬼もくびり殺されているはずだ。

間合いを取っての戦いならば、辛うじて凌ぐことはできるかもしれないが、掴まれた状

態では絶望的な力の差をどうすることもできない。

「帝を喰らう前の前菜にしてやる。せいぜい俺を楽しませろ」

「ひあああつ、そんなあつ！」

「うぐうつ、おのれえつ」

逆転不可能な状態から阿修羅童子はすぐにとどめを刺さず、股間から隆々と屹立させた男根に二人の顔を力任せに押し付けた。

充血に血管を浮き上がらせて躍動的な脈打ちを繰り返す。並外れた大きさを誇る赤銅色のペニスに、冴と荊鬼童子が嫌悪の表情で顔を背けようとする。

「貴様らが俺を楽しませれば、それまでの間、帝の命は長らえるのだが、奉仕を拒むのか？」

「そのような戯れ事を……っ」

「相変わらず下衆ですなっ、阿修羅童子!!」

阿修羅童子の脅迫に二人が憤る。

「そうか、ならば貴様らを始末し、すぐに帝を喰らうことにするか」

二人を押しさえ付けた手に力を込めながら、部屋の隅で立ち尽くす詩朱奈に凶悪な眼差しを注ぐ。

「わ、わかったつ、お前を楽しませてやるっ。だから詩朱奈様に手を出すな！」

絶望的な状況は変わらないが、時間を稼げばなにかしらのチャンスが生まれるかもしれ

ない。嫌悪感を堪えて冴は阿修羅童子に従い、怒張にかぶりつく。

「ああ、冴……」

自分を守るため屈辱的な行為に及ぶ親友に、詩朱奈が悲痛な表情を浮かべた。

だが冴は、気に病むなどなだめるような笑みを帝に向けると、鬼神の陰茎を啜えるため、目一杯に口を開いた。

「はむっ、あむ、ん、あわあ……。なんじゃ、この大きさ……。口に、入りきらぬ……」

並外れた大きさの男根が小さな唇に収まらず、苦心しながら亀頭に舌を這わせる。

「遊んでいるのか？ しつかりと啜えてしゃぶれ！」

「おぶううっ！ あ、あ、があああっ!!」

もどかしさに焦れて、阿修羅童子が剛直棒を無理矢理に口中へと押し込んだ。

顎が外れるかと思った衝撃と共に、焼けるように熱く太い塊が口腔を満たし尽くす。

「んぐううう、いきなりい、ああああっ！ くちゅ、べろ、れろ、ちゅぱあ」

呻きながらも、これ以上鬼神の機嫌を損ねればますます帝が危うくなる。

竿全体を口腔で圧迫しながら、舌を蠢かして一生懸命に舐めしゃぶる。

「ああ、冴様っ！ 阿修羅童子などにそのようなことをっ」

過剰な太肉に口をいっばいにふさがれて、息苦しそうに呻きながら舌を使う主に女鬼神が動転する。

「なんだ荊鬼童子。主人に働かせておいて貴様は高みの見物か？ 貴様が奉仕を拒むのならこやつにその分の仕事を負担してもらうことになるぞ」

「く……、しゃぶればいいんでしょ！ 冴様、わたくしがそれ啜えますから、吐き出してください」

阿修羅童子に詰られて交代を申し出る。

「んむううつ、いぶあらしい……んふあ、あむ、んぐううつ、ああつ」

しかし鬼神の手にながしりと固定された頭は、口に男根を頬張ったまま動かすことができない。苦しげに舌を蠢かして亀頭の溝を穿り返し、口いっぱい広がる恥垢の生臭い腐臭に冴が幼く見える顔を歪める。

「冴様の代わりにわたくしがしゃぶるって言うてるんだから、意地悪しないで、お、おちんちん、こちらによこしなさい!!」

「それほど俺の魔羅が恋しいか。相変わらず浅ましい牝鬼だ」

まるで荊鬼童子が、自分からペニスを啜えたがっているかのような曲解で貶める。

「お、お前のおちんちんなんか、本当なら二度と見たくないけど、仕方ないからっ!」

「ならば無理してしゃぶらなくても構わぬぞ。一条冴の舌遣いもなかなかこなれてきたし、狭苦しい口の締め付けも悪くない」

嫌々な態度の女鬼に素っ気なく返すと、阿修羅童子は長命な童顔鬼操師の口腔へ、腰を

繰り出し始めた。

「んぶううつ、あばつ、おあ、あああつ、う、動かしゆ、にや、あわああつ、んあつ。しよんな大きいもによれ、んぐあ、こんな、されはらああつ！ うぶあ、あばあつ、はぶううつ ぶああああああゝゝゝゝゝッ!!」

ただでさえ狭い口腔を硬い竿肉で滅茶苦茶に掻き乱され、息苦しさを噎せそうになりながら身を振る。

「えぐううつ、んぐああ、あがつ、おつ、あ、あああああつ！」

長さも相当な剛直は、押し込まれるたびに牙の喉を奥まで圧迫し、嘔吐えずくような呻きを絞り出させる。

それでも牙は、阿修羅童子の興味が詩朱奈に向かないように、竿肉に舌を這わせて奉仕を続けた。

「ああつ、わたくしが舐めたいですつ!! しゃぶりたいですからつ! 阿修羅童子、お願いですからわたくしに、あなたのおちんちんを啜えさせてください!!」

主の涙ぐましい様に、荊鬼童子は屈辱を堪えて媚びた笑みを浮かべ、阿修羅童子に懇願する。

「ふん、見え透いた態度を。人間ごときに使役されてすつかり鬼族としての誇りを失ったようだな。憐れな家畜に免じてしゃぶらせてやろう。せいぜい満足させることだな」



すべて請け負うと荊鬼童子が氣を張る。

「んああ、はむん、ちゅぱ、れろ、ぺろぺろ、くちゅくちゅ。くう、まだ、大きく、なつてくりゅ、あああ……」

冴の舌で十分に舐め清められたのに、先っぽに舌を這わせた途端頭がクラクラするような獣臭が口いっぱい広がった。

しかも最初から並外れた大きさの勃起は、刺激が加わるたび止めどなく膨張を続けている。こんな大きさになっていたら、冴の小さな口は裂けていたに違いない。

その前に交代して良かったと思いつつも、荊鬼の口にも収まらないほどになってきて目を白黒させる。

「んくう、うううっ、ああ、先走りの汁もお、勢い、凄いい。もう射精してるみたいに、どぴゅどぴゅ、喉に、来るううっ!!」

ヌルヌルした生臭い汁が絶えることなく流れ込んでくるので、息苦しくてたまらない。「んぐっ、ぐび、ごく、はああああ〜」

「貴様ばかりちんぽ汁を味わってばかりで、こちらはさっぱり気持ち良くないぞ。やる気がないのなら、一条冴に代われ!」

飲み込むのに必死で舌遣いがおろそかになってしまい、阿修羅童子をイラつかせてしまった。

「はうううっ、しゃぶりまひゅからあ。おちんぼ、舐めりゅ、んむむんっ、別にこんな、汚いちんぼ……汁う……飲みたく、んぐ、ない、ぐび……ふはああ、ぢゅば、ちゆる、れるれるろん、ちやぷちやぷじゅぶ、じゅぼじゅぼじゅぼ」

こんな汚らしいモノを、これ以上主にしゃぶらせるわけにはいかない。

「にゅぼ、じゅぼ、じゅりゅ、ずじゅ、ぬばぬばぬば、にゅぶ、ずじゅじゅじゅじゅるる、ずじゅううう……はむん、ちゅば、あむ、にゅむ、かぶんっ」

最悪の鬼神を満足させようと荊鬼童子は、頭を前後に振りたくって巨根を激しく扱きながら、亀頭の裏筋から括れた溝までを重点的に舌先で穿りまくった。

「ふん、最初からそのようにすればよいものを」

どうにか阿修羅を納得させられたらしい。しかしますます怒張のサイズは増してくるし、溢れ出るカウパーは勢いづき、必死に飲み下す荊鬼の腹を満たして下腹に熱い疼きを生じさせた。

「あふう、んあ、あああつ、こん……なあ、なぜ、変な……あむうう、んはあ、気持ち、にいいっ」

阿修羅童子の先走り汁に催淫効果があるのだろうか、荊鬼の腰が誘うようにくねり、股間からトロトロと熱い蜜が溢れ出て、ニーハイを穿いた絶対領域の太腿に滴ってくる。

「はああ、んうううっ……」

膨れあがる下腹の疼きに、メイド鬼神が切ない喘ぎを漏らす。

「すまぬ、荊鬼。後は、ワシがしゃぶるから。はむ、ん、あむ、ちゅぱ、ずじゅじゅ」  
喉奥へストロークされた衝撃がいくらか鎮まつたらしく、冴が荊鬼童子を休ませようとペニスを舌を這わせてきた。

「ふうん、あああ、らいじようぶ、れすう、ちゅぱ、じゅぼじゅぼじゅぶつ。わたくし、まらまら啜えられまふからあ、れる、にゅぼ、ちゅぱちゅぱちゅぱ」

だがメイド服の鬼神は主からペニスを奪い返すようにして、しゃぶる勢いを激しくさせた。

「帝を、んむん、守るのは、ちゅぱ、ワシの役目、じゃから、ずじゅ、じゅるるる、んはあ、やめる、わけには、いかぬ、はむん、あう、んむうう、ふ、太いい……。んむつ、おふつ、んぐつ、あぶ、ふああああ」

詩朱奈から気を逸らすため、なんとしてでも阿修羅童子を快感に酔わせなくてはならない。さらに荊鬼から男根を取り戻して再び口に頬張ろうとするが、一段と勃起を増した鬼神の剛直が子供サイズの唇に収まらない。

「それでしたらあ、冴様のお手伝いをしゆるのが、わたくひの役目れふから、いっしょに、しゃぶりまふからあ、あむ、ちゅぱ、んむつ、はむんつ、べろ、ずじゅじゅつ」

既に鬼神の唇でも危うい怒張を啜えるのは断念し、荊鬼童子は極太幹を乳房に挟んで扱

きながら、握り拳のような亀頭を側面から齧り付くように刺激した。

「わ、わかった、一緒に手伝ってくれ、荊鬼。この太すぎる逸物う、ん、ちゅぱ、おぬしの乳でなければ、太刀打ちできぬ。れる、かぷん、ちろ、ちゆる、れるれおろれる」

子供のような体型通りに、冴の胸は悲しいくらいにべったんこだ。

メイド服から溢れ出ていた荊鬼童子の圧倒的な巨乳のような真似はできない。

小さな両手で阿修羅童子の睾丸を撫で転がしながら、冴もまた赤銅色の亀頭に舌を這わせた。

「俺の魔羅を奪い合っていたかと思つたら、今度は二人がかりか。だがこの程度では俺は満たされぬな」

「くふっ、小癩な鬼めがつ。こ、これならどうじゃ。れる、ちろっ、ちゆくちゆく、じゆるるっ、ぬちゅ、くちゅ、ちゅぱあああ、ちゅじゅじゅっ」

「阿修羅童子のくせにい、贅沢。んあむ、冴様とわたくしが、むあん、奉仕して、あげてるのに、じゅぱ、べろん、はあむんっ」

不満げな鬼神に、冴が捏ねるような手つきで睾丸を弄び、窄めて硬くした舌で亀頭の溝をなぞり裏筋をグリグリと激しく抉る。

それと同時に荊鬼童子は激しく巨房を弾ませて扱く勢いを増して、猫のようにざらざらの舌で亀頭全体を舐め回しながら、鋭い犬歯での甘噛みを繰り返す。

「うむ、少しはましになってきたぞ。帝を喰らう前菜としてはなかなかの味わいだ」  
 亀頭の先から竿の付け根まで、さらには睾丸を含めて過剰な刺激を与えられ、鬼神が満足げな声を漏らす。

「これならば俺が鬼慰姫を喰らった後も、肉奴隸として飼ってやってもよいな。貴様ら鬼繰師どもが下僕として酷使した鬼神たちの慰み物にしてやろう」

はち切れそうな竿を快感に脈打たせながら最強の鬼神が一条家の総領を貶める。

「貴様も主と共に、餓鬼専用の肉便器として使ってやるぞ荊鬼童子。奴らの性欲は限りがないからな、寝る暇もないほど楽しませてもらえな」

自ら望んで鬼繰師のしもべとなった者には、同胞であろうと容赦がない。

慰み物として鬼神に飼われて生き恥を晒すくらいなら、この場で殺されたほうがまだ。そう思いながら冴も荊鬼も余計に阿修羅童子を挑発する言葉を控え、男根への奉仕に集中する。

「帝よ、お前のためにこの二人が、屈辱に耐えながら俺を満足させようと必死になってるのに、言葉も一つもかけてやらぬのか？　そもそもお前が大人しく俺に喰われておれば、一条冴も荊鬼童子も、このような辱めを受けずにすんだのだぞ」

二人が挑発に乗らないと知ると、阿修羅童子は部屋の隅でこの惨状を悲痛な眼差しで見詰めている詩朱奈に声をかけた。

「……………ッ」

しかし彼女もまた、鬼神の挑発に唇を噛みしめながら言葉を堪えていた。

冑と荊鬼を身代わりにするのは耐えがたいことだが、それでも国を統べる帝が自ら鬼に身を差し出すわけにはいかない。

心情では自分が身を差し出したくても、それは決して許されないことなのだ。

二人を慰める言葉もかけられず、せめてこの忌まわしい光景から目だけは背けるまいと大きく見開いた瞳に今にも溢れそうに涙を浮かべる。

そんな詩朱奈の様子に、鬼神はますます怒張をいきり立たせた。

ただ帝を喰らうだけならば、すぐにでも冑と荊鬼の息の根を止め強引に奪えばいい。

けれど鬼族の習性として、阿修羅童子は敵をいたぶり悦楽を求めることに夢中になっていた。

「ん、じゆる、あむんつ、あふつ、んあむうつ!!」

「ふあぐううつ、がぶつ、んぐううううつ!」

屈辱に憤りながらも、詩朱奈に向けた阿修羅童子の注意を引き戻そうと二人は怒張への刺激を激しくさせる。

乳房での扱きをさらに勢いづかせながら、荊鬼童子が鋭い犬歯を食い込ませて、太い幹竿に思い切り噛みつく。

「むんっ、生温なまぬるいしゃぶりほうで物足りなかったが、今のはなかなか良かったぞ。もっと続ける」

他の鬼神ならペニスが千切れるほどの威力なのに、阿修羅童子の巨根は心地良さそうに脈打って、射精の予兆を示す。

「んくうう、怪物……めえ……あぐっ、んぎゅ、がぶっ、がりっ、んくうくうくうッ」

鬼慰姫の錬気を喰らって、鬼神から見ても桁外れの存在となった阿修羅童子に悔しげな呻きを漏らしながら荊鬼が竿肉を囓り続ける。

「じゆるるるっ、ずじゅううっ！ くふう、汁の量が、また一段と……ッ。これでは、キリがない……。ぐび、ごくごく、ちゅううじゆるじゆるじゆる、ずじゅっ、んぐ、あぐ、ぐびっ、ごくごく、んぐんっ!! ふああ、ああはああ……ッ!!」

噛みつききの刺激に先走りの量が増し、亀頭の先つぽを啜え込んだ冴の喉に止めどなく流れ込んで来ていた。

荊鬼童子同様、熱い生臭液に情欲を煽られ、白拍子装束の股間を愛液でぐっちより濡らしながら、鈴口に湧き出す濃厚なヌメリを吸い続ける。

「俺の汁がよほど気に入ったようだな、一条の総領。ならばさらに濃厚なものを味わわせてやるぞ」

「くうっ、違うッ、これは、じゆるるっ、ぬあ、あああ、お、お前の、ものなど、ちゅば、

んぐ、ぐびぐび、ごくん、ふあああ〜、欲しく、ないっ」

「お前の、こんな汚らわしいものなんか、はむんっ、み、見たくも、かぷっ、あぐっ、ちゅぱ、ぺろ、見たくもないんだからあ、ずじゅう、ちゅば、ちゅぱっ」

「羨ましがるな、荊鬼童子。貴様にもタツプリと注いでやる」

帝から奴の興味を逸らすため嫌々奉仕をしているのに、鬼神の先走り汁に発情させられて、冴も荊鬼も悩ましい疼きが収まらない。

「んふっ、ふあ、あああつ、なにか、あ、ああつ、くるう」

「あひっ、阿修羅童子の汚らわしいもの、おあ、あ、ああ、ビクンビクンしてるう」

嫌悪すべき敵の男根が脈打ちを激しくさせると、期待するかのように胸が高鳴り、熱を帯びた股間に愛液がじゅんと溢れ来る。

「射精だすぞ。しっかりと受け止めろ！」

「ふあああつ!!」

「はあううっ！」

阿修羅童子に命じられ、二人で口づけを交わすように亀頭の先を双方の唇で包み込む。

その刹那、

どびゅううううっ！ どびゅどびゅどびゅ、びゅるるるる〜〜〜〜!!

壮絶な勢いで大量のスペルマが鬼神王の陰茎から噴射された。

「んぶうううううつ！ はぶつ、おあああああつ、阿修羅の、あばああつ、射精いいつ、んあ、ふあ、多すぎいいつ、ふぐううううああああつ!!」

「くふあああつ、なん……じゃ、この量ツ、へぶつ、うぐうううつ!! 濃いもの、どびゅどびゅと、んぐつ、んぐんぐう、おあああああつ、ふあああつ!」

一人で唾え込んでいたらほつぺたが破裂していたに違いない。

並外れた量の精液が、冴と荊鬼童子の口腔を一瞬で満たし、有無を言わず喉奥へと流れ込んでくる。

拒もうとすれば鼻に逆流して窒息しそうになる濃度の高い白濁を、グビグビ喉を鳴らして必死に飲み込む。

「あううう、んあ、は、あああああ、こんな……にいい、げふ、んうう、はあ、あああああつ、精液で……腹一杯に……」

「はひい、んあ……、ぐふう、ふああああ……、力があ、入らにやいい……。阿修羅童子なんかの、こんな……飲んじやつたあ……」

散々飲み下した後、脱力的な生臭さとえぐい味わいが込み上げて、二人の脳裏をぐちやぐちやに蕩けさせた。

口中に収まりきらず飛び散った射精を浴びて、全身白濁まみれのどろどろになりながら、大量の飲精でぽっこりと腹を膨らませて、冴と荊鬼がしどけなくへたり込む。

「くう、ん……あ、あはああ……」

「身体が、あああ、熱い……」

脱力的な精液臭が立ち込める中、カウパーの発情より激しい疼きにカクカクと腰をくねらせる。

「たらふく飲ませてやったつもりだが、二人とも物足りないらしいな。孕むほど女陰ほとに注いでやらぬと、牝の欲求が満たされぬか」

精液を放って萎えるどころかますます勃起を逞しくさせながら、最強の鬼神が牙と荊鬼の尻を掴み上げて四つん這いの姿勢を取らせた。

「ひうっ!!」

「はわああっ!」

そのまま下着がむしり取られ、溢れ出た愛液に濡れ綻んだ女陰が、ひゆくひゆくと蠢く姿をさらけ出す。

「やはり俺の物を欲して、涎を垂らしながら喘いでおるな。今すぐ望みのものを与えてやろう。ありがたく思え」

「くうううっ、おのれえ……っ」

「あしゆらどうじい……ッ」

熱帯びた怒張が迫る気配に子宮が切ない締め付け感を覚え、意志とは関係なく媚びるよ

うに二人の尻が迫り上がった。覚悟をしながらも、悔しげな呻きが漏れる。

「ああ、だめえ！ そんなことっ」

そのように、詩朱奈がたまらず声を上げてしまった。

「もうやめて、こんなこと……。祐……。いえ、阿修羅童子。わたしの大切な人たちに、これ以上酷いことしないで……」

遙か太古の昔、最悪の厄災をもたらしたときと同じに、何者にも束縛されず己の欲するがままに振る舞う鬼神へ、無駄と知りながら懇願する。

「おやめください、詩朱奈様。ワシらのことは、気にせずに……っ」

せっかく戯れに冴と荊鬼をいたぶっているというのに、下手に刺激して興奮めさせたら、阿修羅童子はすぐさま詩朱奈を喰らうだろう。冴が慌てて帝をなだめる。

「そう急かすな。お前はこいつらをたっぷり味わってからじつくりと喰らってやる。それまで存分に怯え戦慄わなき、絶望に浸っておれ」

人々の恐怖や哀しみが鬼の糧となる。詩朱奈を苦しめ、希望を奪い尽くしたほうが、帝の錬気がより美味になると思ったのだろう。阿修羅童子は今すぐ詩朱奈に手を出す気はないらしい。

「さて、どちらを先に喰らうか？」

肉感的な尻の狭間で透き通るように白い褻を窄まりっぱなしにした荊鬼童子の女陰と、

小振りな尻房の狭間でくぼくぼと開閉を繰り返す膣口を比べる。

「ワシの膣内で、んう、満足……してあげ、あ、阿修羅童子よ」

「冴様を汚すなんてもつての外ほかですつ。わ……わたくしに入れなさいつ」

お互いに庇い合つて、自分のほうへと鬼神の怒張を迎えようとする。

「ふん、やはり鬼族と人間の主従関係など浅薄なものだな。俺の魔羅欲しさに争うとは、浅ましい牝豚どもめ」

「ひあつ！」

「ぬうっ!!」

そんな二人の態度を嘲りながら、両者の腰を抱え込むように引き寄せる。

「安心しろ、貴様らの意地汚い牝穴、まとめて相手してやるぞ」

「な、なにを？ んおあああつ、はああああうううつ、太いいいつ、太すぎるの、そんな、いきなりいあああああつ、は、入つて、んあ、ああああつ、そんな、裂けるう、おあ、あああつ、ワシの穴あああ、入り……きらな……いんあああああああつ!!」

不安を覚え尋ねた途端に、冴の膣口へと焼けるように熱い龟头がズンと叩き付けられた。鋭敏な粘膜部への衝撃に背筋を仰げ反らせていると、握り拳大の肉鏃にくやじりはメリメリと強引に膣口を押し広げて狭い穴中に勢いよくめり込んで来た。

十分に分泌した愛液のヌメリに任せ、綻んだ襞壁を遠慮なく刮げて牝穴を深々と満たす

硬くて太すぎる感触に、童顔を引き攣らせて身を強張らせていると、重々しい衝撃が子宮を見舞う。

悲鳴のような上擦った嬌声を上げて四つん這いの身体を震わせると、過剰に勃起した極太の陰莖は窄まる膣穴から一気に抜け出てしまった。

「はああああんっ!？」

挿入からの抽送を予想していたのにはぐらかされて、残念そうな喘ぎが溢れてしまう。その冴を嘲笑うように、阿修羅童子の剛直竿は隣で身を振らせる女鬼神の股ぐらへと向かっていった。

「んひあああつ!! こお、これええつ、あああつ、はああああつ、はああああつ、阿修羅……のお、汚いちんちんっ、あああつ、はう、おあああああつ、太ッ、太いいいっ、あひっ、あ、あああああつ、抜け、てるっ、わたしの、あああ、穴あああつ! 入って……来るううっ」  
冴への挿入と同じに膣口へ亀頭の先を叩き付けると、そのまま強引に鑿壁をこじ開けて太すぎる硬肉竿をミシミシと押し込んでくる。

「ああ、はあああううっ、だ、だめ……んおあああああつ!! はひ……いいッ!」

鑿穴を奥いっぱいまで満たすと、子宮を容赦なく弾いて息が止まるような衝撃をもたらす。やはりストロークを期待して荊鬼の膣も窄まるが、阿修羅童子の男根は締め付けから逃れるように抜け出てしまった。

そのまま、再び冴のヴァギナに挿入してゆく。

「ひあああつ、来たああああつ！ あふつ、あふあああつ、太いのお、んおうううつ!!」  
忌まわしい敵の牡竿に犯されているというのに、一度挿入されたことで硬くて逞しい感  
触を膣が覚えてしまったため、喜ぶような悲鳴を上げてしまう。

「はうつ、だめだつ、こんな……の、おをおううううつ!!」

快感に心奪われそうになり、慌てて気を引き締めようとするが、子宮をまた容赦なく弾  
かれて、軽く達するほどの衝撃が冴の小柄な身体を揺るがす。

悦楽をもつと感じようと襲壁が窄まり、もつと奥まで啜え込もうと反射的に尻が突き出  
されるが、阿修羅童子は今度もまた一度激しく突き込んだだけで極太剛直を冴の膣から抜  
いてしまった。

「ああああ……」

鬼に犯されるなんてまっぴらなはずなのに、悲しげな溜息を漏らしてしまう。

「なんだ？ 俺の魔羅が入っておらぬと不満か？」

「あ、阿呆、おぬしの粗末なものが、くう、で、出て行つてくれて、せいせいしただけじ  
や……、はう……ん、うう……」

阿修羅童子の嘲るような口調に、意地を張って言い返すが、キュンキュン窄まる膣穴の  
疼きは収まらない。

鮮烈すぎる刺激を一発食らわせただけで膺穴を放置され、もどかしい欲求に身をくねらせていると、最悪の鬼神は隣で喘ぐ荊鬼童子のヴァギナに巨根を勢いよく突き込み、一気に子宮を跳ね上げた。

「おあああああんっ!! くううううっ! ふああああ、まだ……んあはっ!」

彼女もまた怒張に深々と貫かれた途端、絶頂のように背を仰け反らせて嬌声を張り上げた。だが一度の突き込みで巨肉竿を抜かれて、情けなく喘ぎながら亀頭を追いかけるように尻を突き出す。

「貴様も俺の魔羅をもつと味わいたいようだな?」

「ち、違うう。阿修羅童子の、汚い……ふあ、あああ、ちんこ、なんかあ、気持ち悪い、ただだし……、ひあ、あ、んあ……ああ……」

荊鬼童子も最悪の鬼神にからかわれ、ムキになって否定する。けれども腰が物欲しげにくねり、膺口からとろとろ愛液が溢れるのを止められずにいる。

「ほああああ……、こっち……んあ、来るう……」

荊鬼の膺からペニスが抜かれると、今度は自分の番だと戦慄いてしまう。

ぞぞぞと全身を栗立たせながら、期待するように膺口が弛み開き、激しい擦れ合いを甘美へ転化させる蜜汁がぶじゅぶじゅと飛沫を散らして大量に噴き出る。

「ふあっ!! はうっ! おあ~~~~っ、おひい、しゅごひいああああっ!」

待ちに待った亀頭が膣口に触れた途端、自分からも尻を迫り出して勃起肉を咥え込む。挿入が加速され、硬く節くれ立った幹肌がヌメヌメの襞壁をゴリゴリ激しく刮げる。視界に火花が瞬くほど狂おしい刺激に溺れた。

「はふうんっ!! くひィっ、お、あ、あああ……!! ふえ? は、あ、あああ……」  
ズシンと脳天まで突き抜けるほどの衝撃を子宮に食らわされ、また軽く絶頂しながら快感の持続を欲する。

だがやはり阿修羅童子は膣からペニスを抜き放って、荊鬼童子の蕩けた牝穴に突き入れた。

「あくううううっ! んあああつ、だめ、なのにい、んあはあつ、イカされてるう、阿修羅童子なんかの、汚いちんこ……はわっ、また抜いちやうッ!! ふあああ……」

強烈な刺激を一度だけ喰らわせた直後に、束の間放置して、見せ付けるように他の膣を犯して、情欲を煽ってくる。

「んっはああああつ!! おあああうっ! だめ、じゃ、ああああ、入れられるの、待ち望んで……してしまうう。阿修羅童子の逸物う、待ち遠しくて、あ、ああああつ、んひああつ」  
入れられたまま連続で突き込まれて徐々に絶頂へと昂っていくような、持続的な快感は与えてもらえない。だが先っぽから根本までペニスが勢いよく膣内に埋まってくる感覚を何度も味わわされ、犯されているという意識を強調される。

163

しかも抜いては待たされ、また入れられる勢いが人間の限界を超えた鬼神の腰遣いで加速し、お預けの時間を短縮させてきた。

「あひつ、あ、ああ、はああああつ、だめ、じゃ、ああああつ、このままだと、おあ、イ、イク……んうああつ!! いちいち入り口……から、ふあ、穴の奥うまで、ああああ、ずぼずぼ、されてるのに、こんな、ああ、続けて、来られたら、ふあ、あ、ああ、んも、もお」  
「ひうううつ、ちんぽ、ちんぽごんごん来るッ、ああああつ、阿修羅童子の、太すぎるのつ、奥につ! こんな、いっぱいいされたらあ、あああああつ!! やあああつ、だめ、そんなに、だめえ、んああああああつ!」

どこまでも加速する交互の突き込みに、冴と荊鬼童子の喘ぎが重なり合った。

これまで突き込まれたと思うと、もう片方の膣に移ってしまいもどかしく感じていたのだけれど、並外れた太さの剛直竿に膣口から子宮まで全力の刺激をもたらす挿入をハイテンポで繰り返されると、過剰な快感を受け止めきれない。

「ふああああうううつ、ダメえ、じゃあああつ、んあ、おお、ああつ、逸物にい、全身、おかしくさせれううつ、んぬううつ! あひつ、ああああ、達して、しまうつ。詩朱奈様、守らねばいかぬのにい、刺激い、堪えきれぬう、あああああつ!!」

「らめ、イクツ、らめ、これ、おあああああ、阿修羅童子の、ちんぽに、辱められてるのにい、んああ、感じてるう、ああああ、身体あ、太いので子宮う弾かれてッ、ああああつ、

喜んじやつてる、あ、あああつ、も、もう、ん、ふああ、もうううっ！」

帝から鬼神王の意識を逸らすために、もつとこちらの身体につなぎ止めておきたかった。なのに予想以上の悦楽をもたらされて、冴も荊鬼も絶頂に迫る。

勢いよく入って来て子宮を殴りつけると、もう一人のヴァギナ目指して抜け出る極太肉へ。必死に絡みつこうと襞壁が痙攣しながら収縮する。

その締め付けに擦れ合う刺激がまた高まり、阿修羅童子の陰莖を激しく脈打たせた。

「うむっ、射精すぞ」

快感に昂った様子もなく、阿修羅童子が警告のように呟く。

「ひあつ!!」

「はわあ！」

怒張の痙攣がさらに勢いづき、冴も荊鬼も牝の本能が期待を膨らませて腰を迫り上げさせる。埋まり来る男根との密着度を高めようと膈壁がキunksンキunksン窄まる最中、

どびゅうううううっ、びゆるびゆるぶびゆるるるびゅううううう~~~~~ッ!!

「ひぎいいいいいっ、おああああああつ、射精され……ちやつたあ、阿修羅童子、なんかにつ、射精いっ、んあ、中出しいいっ!! 汚い精液、膈内で、射精され、た、ああっ」

最強の鬼神は、荊鬼童子の膈内へ夥しい精液を勢いよくぶちまけていた。

「あう、んあ……はあ、荊鬼の、ほうにい……」

鬼神のペニスに犯され、生で射精されるなんて最悪としか言えない。

なのに、子宮の奥を濃厚な濁液の奔流に打ちのめされ、背筋を反り返らせて震える。そんな女鬼神の姿に羨ましいような感情が湧き起こった。だがすぐに、

ぬぶつ、ずぶずぶぶんっ！ どびゅううつ、びゆるぶびゅびゅばばばばばばあああ  
~~~~~ッ!!

「ぬひいひいっ、んおおおつ、ああ、あはあああああつ、ワシのお、あああああつ、  
膣内にまで、んあひつ、あああつ、射精イイッ、んはああああつ！」

射精しっぱなしな陰茎が、窄まる襞壁を押し開いて膣奥に埋まり込む。  
意識が点滅するほどの強い勢いのスペルマを、子宮へ直撃させた。

「くうううつ、あああああつ、んあひつ、あ、あああつ、こんな、だめ、じゃ、ああつ、  
ワシは、あ、ああつ、こん……な、あああ、熱いの、ふあ、ああ、奥に、までえ、あひ、  
あひいひいっ、んい、イイ、イクウウウウ~~~~~ッ!!」

「はひいひいっ、んあ、いああつ、やつ、なのにいひいっ、子宮、いつぱいい濃いのがッ、ん  
あああつ、阿修羅童子の汚い、汁にうつ、んううつ、あああつ、イカされ……るう、ふえ  
ええあああつ、ンイクウウウウ~~~~~ッ！」

ゲル状に近い濃厚な飛沫を散らして、収まりきらないほど大量の精液を膣口から噴き出し、  
涎は荊鬼童子と共に絶頂に達していた。

「おお、あ、ああつ、だめえ、んう、頭あ、蕩けるう、ふあ、あ、ああつ、イキつばなし、される、ああ、これえ。鬼神の、射精い、あああ。激し……すぎりゆ、ふああ……」

「あああ、阿修羅童子なんかにい犯られたのにい、あ、あああ、中出しされて、んあああ、イクの、あう、止まらないい……あひ、ああ、あはあ……」

極太の巨根が抜かれた後も、狂おしい痙攣が止まらず二人とも脱力した身体をぐつたりと横たえる。

絶頂の余韻というには余りに激しい悦楽の波に、冴と荊鬼童子が揺さぶられる。

射精を果たした鬼神はまだ少しも勃起の萎えぬ陰莖を脈打たせて、二人に冷たい眼差しを注いできた。

「もう少し長く味わえると思ったが、呆気なく喰らい終わってしまったな。帝を守るためなにか仕掛けてくるかと思えば、肉欲に呆けてよがっているばかり。俺を封じた鬼繰師とそのしもべとは思えぬ体たらく。呆れ果てたぞ」

鎮まらぬ快楽に立ち上がることもできない二人へ厳しい言葉を投げつけると、阿修羅童子は絶望の面持ちで立ち尽くす帝へと向き直った。

「戯れは終わりだ。永劫帝詩朱奈よ、貴様の肉も気もすべて俺が喰らい尽くし、鬼慰姫の鬼繰に抗する力とさせてもらうぞ」

詩朱奈に迫ろうと鬼神が足を一步踏み出す。

だがその刹那、帝の身体から目映い輝きが生じて、いくつもの魔法陣が床や空中に描き出される。

「こ、これは？ 冴……!？」

「おのれ鬼繰の総領。やはりなにか小細工を仕掛けたか」

詩朱奈自身の驚く姿に、冴の仕業と悟り阿修羅童子が問う。

「先ほど詩朱奈様を突き飛ばしたとき、お背中にこっそりと式術符しきじゆつぷを貼らせていただきました」

だが彼の質問には答えず、長命の童顔鬼繰師は帝に語りかける。

「さつき助けてくれたときに？ ああ、本当だ。全然気付かなかった」

詩朱奈が確かめると、衣の背中に紋様と梵字が書き込まれた札が貼り付けられていた。

そこから輝きと共に幾多の魔法陣や文字列が生まれ出て、組み合わせりながら目まぐるしく展開してゆく。

「この術は始動まで時間がかかるので、その間、阿修羅童子の気を引くのが大変だったが、もうこれで大丈夫じゃ」

「ほう、俺と交わったのはこのためだというのか？ しかし今の俺にどのような策を講じようとも無駄だぞ。結界も封印も、俺を阻むことはできぬ」

冴の身体を張った式術の起動を、強大な鬼神が嘲笑う。

「ああ、お前を倒すことも封じられることも、ワシには無理じゃと悟ったわ。じゃから……」  
ようやく阿修羅童子の声に応じ、冑が自嘲気味に呟く。その刹那、

「ああっ、これはっ!! まさか、冑っ!!」

空中に青い輝きを放つ大きな光の球が出現し、詩朱奈が驚きの表情を浮かべて冑を見る。  
「破境の光扉はきょうのこうひ。大昔に、暗殺の脅威に晒された幼い詩朱奈様を、別の次元に存在するもう一つの世界へと逃がした扉ですじゃ」

「なんだと!？」

冑の言葉に阿修羅童子が血相を変える。

「次元の狭間への境を超えた鬼神の力でも、遥かな次元の隔たりを跳び越えることはできない。この国を見捨てることになるのは不本意でしょうけれど、でもワシは詩朱奈様についてまでも無事でいてもらいたいから、それが祐殿と、先代の冑が、ワシに託した願いだから」  
遥かな昔、暗殺者としての名前を捨てて、守護者としての名を受け継いだときに交わした約束を胸に、冑が術の発動を完成させる言葉を口の中で小さく唱えた。

「おのれええっ!!」

阿修羅童子が帝へと飛びかかる。だが、

「待って、でも、そんなことしたら、冑と荊鬼がっ!」

逃げるのならば一緒にと訴えかけるその途中で、帝の姿は青い光球の中に吸い込まれ、

そして輝きそのものと共に一瞬で消失した。

「き……貴様あ、やつてくれたな!! よくも俺を謀って、帝をおおおおおつ!!」

帝の錬気を奪い損ね、憤怒の形相で阿修羅童子が迫り来る。

「強大な力を得れば得るほど、驕り高ぶり余計なことにうつつを抜かして足元を掬われる。相変わらずじゃのう、阿修羅童子」

「どう足掻いてもお前は冴様には敵わないのですよ、間抜けですわね」

錬気を使い果たしたうえに、散々に犯されて脱力した身体ではもう戦うことができない。それならばと満面の笑みで、一条冴と荊鬼童子が最強の鬼神を虚仮にする。

猛る憤怒に阿修羅童子が轟と咆えて、圧倒的な錬気を炸裂させた。

一条冴と荊鬼童子が同時に消滅する。

目を焼き尽くす閃光を放ち、鼓膜を突き破る轟音を響かせ、大量破壊兵器にも等しい爆裂が御所を中心に半径十キ口内を完全に消滅させた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**